1920年代から1930年代にかけての自由学園の裁縫教育

―和裁と洋裁における生活合理化の実現に着目して―

教職開発コース　　清　重　め　い

Sewing education at Jiyu Gakuen from the 1920s to the 1930s:
Focusing on the Realization of Rationalization of Life in Japanese and Western Dressing

Mei KIYOSHIGE

The purpose of this paper is to clarify the historical significance of Japanese dressmaking education by linking Jiyu Gakuen's sewing education practice from the 1920s to the 1930s with the concept of the rationalization of life. The examination of historical materials revealed that the philosophy of founder Motoko HANI was rooted in "beautification"; that the school, which was oriented toward Western clothing, also put an emphasis on Japanese dressmaking; and that Western dressmaking was closely related to art education, but that it turned into a factory beyond rationalization.

目　　次

1　はじめに
2　羽仁もと子の衣生活に関する思想
　A　もと子の服装教育観
　B　もと子の裁縫教育観
3　自由学園の和裁教育
　A　青芳とみ子の和裁教育思想
　B　関東大震災での実践
　C　和裁裁縫百時間教授
4　自由学園の洋裁教育
　A　西島芳太郎の洋裁教育観と学園初期の洋裁教育
　B　洋裁と芸術の融合
　C　洋裁教育の合理化と工場化
5　おわりに
注

1　はじめに

本稿は，1920年代から1930年代における自由学園の裁縫教育実践を，生活合理化概念と結びつけて捉えることで，その和裁教育と洋裁教育の歴史的意義を明らかにすることを目的とする。

自由学園は，1921年に羽仁もと子・吉一夫妻によって現在の東京都豊島区西池袋に設立された，当時の文部省の高等女学校令によらない各種学校[1]であった。中流階級以上の家庭出身の子女が中心となって通っていた学園は，大正新教育の中で経済的に安定をほぼ保障された中間市民層のための私立学校として位置づけられている[2]。学園に通う生徒たちは裁縫・家事の経験に乏しく，自分の手で生活を営めるよう「生活即教育」を理念とし，「雇い人のいない」「自労自治」の生活が課された[3]。この学園生活の理念と実践の根底には，もと子の生活合理化思想があった。羽仁夫妻は学園設立以前より，雑誌『婦人之友』を刊行していた。『婦人之友』とその前身にあたる『家庭之友』は，中流の営むべき「簡易生活」の思想を引き継ぎつつも，実際の家庭での家事労働により即した家事技術・知識の具体性を求め，合理性を求める姿勢の強い婦人雑誌として位置づけられる[4]。この実生活ベースの姿勢から，もと子は「性別役割分業を認める良妻賢母主義の系譜に属」しながら，「儒教的な」良妻賢母ではなく，「現実に即して理想実現を謀る中庸思想」としての良妻賢母主義に属すると指摘される[5]。そのためもと子は，衣生活に関しても機能的・経済的合理性という観点から洋装を奨励し，『婦人之友』においても洋裁の方法を積極的に発信した。

では，洋装奨励など生活合理化に積極的であったもと子は，将来その担い手となる女学生たちにどのような教育を実践したのか。学園の具体的な教育に触れた研究としては，美術工芸教育に関する成立・発展過程[6]や，戦時中の学園の動向[7]を明らかにした村上民の研究がある。また，戦時下の裁縫教育実践について

明らかにした拙稿では，生活合理化理念と戦時体制の親和性について指摘した[8]。他の自由学園関連の研究としては，もと子の思想や生涯に関する研究[9]や，『婦人之友』の読者の会である「友の会」の活動を通史的に描出した研究[10]，北京生活学校に関して検討した一連の研究[11]などがある。女子教育の要としての料理・裁縫教育はもちろん学園でもあった[12]が，もと子の思想に基づいてそれらがどのように実践されたのかの検討は十分ではない。もと子が洋装を奨励したことから，彼女の洋装や衣生活に関する生活合理化思想が，特に学園の裁縫教育にどのように表れていたのか検討する必要があるだろう。

学園の裁縫教育の意義を検討するために，まずは同時代の裁縫教育の状況を概観する。常見育男によれば，大正期の家事・裁縫教育は，大戦後の不況による節制奨励や1920年の高等女学校令改正に基づく良妻賢母主義の再認という流れの中，科学的視点に基づく家事・裁縫の教授法が模索された[13]。こうした状況下で国策として生活改善運動が展開され，衣生活についても服装改善運動にて洋装が奨励された。この時奨励された洋装とは，鹿鳴館時代に西洋への近接性を示し権力を誇示する装飾性の高い洋装ではなく，生活の必要に沿った非常に簡素化された洋装であった[14]。これらの運動の内容を婦人雑誌から明らかにし，裁縫教育に洋裁が導入されていく様子を明らかにしたのが，夫馬佳代子らの研究である[15]。また，桑田直子は1920年代における成田順の洋裁教育論を取り上げ，当時登場しつつあった既製服の管理能力の育成という要請への対抗として成田が使用したのが「主婦裁縫」イデオロギーであったという事実との間にディレンマがあったことを指摘する[16]。大正期は洋裁を裁縫教育に導入しつつある時代であり，ちょうどその時期に設立された学園はその潮流に乗っていたといえる。そのうえ，1921年の設立当初からすでに洋裁を本格的に教育に組み込んでいたことから，初期の教育実践として位置づけられるだろう。

また，大正新教育と裁縫教育の観点からは，田中陽子が木下竹次と黒川喜多郎の自発的・創造的学習の内容に触れ，児童の自発性・個性を尊重する指導を提唱していた一方，具体的な方法論として落とし込めていなかったことや実技的技能の習得が不十分であったことを指摘する[17]。木下竹次の裁縫教育に関する研究は一定数見受けられる[18]が，それらの研究では木下が裁縫教育の到達を「裁縫心」の育成，すなわち技術とともに児童の自発的な裁縫を志向する意志の育成に据えていたことを彼の著書群から明らかにしている。同時代の学園における裁縫教育は，洋裁志向でありながら和裁も重視していた他，教授法における合理化と技能獲得の徹底を探求していたことが特徴として挙げられる。また，ただ合理化するだけでなく，美術教育との往還関係の中で服装における「美」の実現を模索していた。一般的な良妻賢母志向の女子教育と同様に，和洋共に裁縫の技能獲得を重視しつつ，「美」という新たな観点を持ち合わせた実践となっていた。

ここで，自由学園・裁縫教育関連の先行研究の状況を概観して明らかになったことを 2 点挙げる。まず，もと子の生活合理化思想に関する言及は多々あるが，自由学園という場でそれらがどう実現されたのかの検討が不十分であることが挙げられる。また，裁縫教育史では制度史や教科書内容に関する検討は一定程度蓄積があるが，実践レベルで具体的にどのような教育が展開されたのかに関する研究が少ないという課題がある。そこで，本稿では，もと子の生活合理化思想と教育の関係に着目しつつ，その具体相として学園の裁縫教育実践を描き出すことで，大正期における裁縫教育史の補完を目指しつつ，さらにその歴史的意義を検討する。

以上より，自由学園の裁縫教育の歴史的意義を明らかにするためには，⑴羽仁もと子の衣生活に関する合理化思想とは何か，⑵洋装・洋裁志向の中で和裁教育では何が目指されどう位置付けられていたのか，⑶洋裁教育はどのような展開を見せていたのか，の 3 点を明らかにする必要がある。これらの問いに答えるべく，第 2 節ではもと子の衣生活に関する思想を，生活合理化思想と照合しながら明らかにする。第 3 節では，具体的な教育実践としてまず和裁教育について，その指導者である青芳とみ子の思想と実践を描出しつつ，その位置づけを検討する。第 4 節では，洋裁教育についてその指導者である西島芳太郎の実践を参照しつつ，特にもと子の美化に関する思想との関連を明らかにする。最後に，自由学園の裁縫教育の歴史的意義について考察する。

2　羽仁もと子の衣生活に関する思想

自由学園における裁縫教育は，もと子の生活に関する思想，特に生活合理化思想を土台として構想されていた。よって本節ではまず，主にもと子の1920年代の論考を基に，もと子の生活合理化に関する思想の中で衣生活に対するもと子の思想に着目して描出し，もと

子が自由学園で服装教育や裁縫教育をどのように位置付けたのかを明らかにする。

A　もと子の服装教育観

本項では，洋装推進も含めたもと子の服装教育観を，洋装推進の背景，制服批判，服装教育を通した美的感性の涵養という３つの視点から描出する。

もと子は，洋装推進者であり，『婦人之友』において洋服の作り方を社会に発信し，自由学園では洋装を推奨し洋裁教育を積極的に行なっていた。第一次世界大戦が終戦し，関東大震災を経た日本では，男性の洋装化や子どもの活動衣の普及が先に進み，女性の洋装化も遅れながら進んでいく[19]。雑誌『婦人之友』でも，日常使いとしての和服の不便さに対して洋服の合理性を主張し，「洋服は金のかかるもの」という当時の観念を払拭するべく，洋裁を積極的に紹介し，洋服は自分で作ることのできると喧伝した[20]。

もと子は洋装を推進しつつも，同時代に普及しつつあった女子の洋装制服には批判的であり，「女学校で制服を定めるといふことほど，間違ったことはない」[21] と断じた。そのため自由学園の設立規定には，「制服はもちろん規定しません。ただ簡単な洋服を着せて頂くこと」[22] とあるだけだった。制服規定を，「生徒はお仕着せのように，唯それを着ているといふことは，ちょうど子供らを服装の牢獄に入れるようなもの」[23] と捉えて敵視した。もと子は，制服を定めないことの教育的意義を，女子が良い服装というものを学んでいく機会と，制服のない自由な状態の方が学園で洋裁について学んでいく中で自分が縫った洋服を着用するという機会の２つを提供することと捉えていた。「洋服をぬふことのはじめは着ること」[24] と述べるように，洋裁を学ぶ前段階として，洋装に慣れることの必要を主張した。

もと子はまた，服装教育を通した美的感性の涵養というものも重視した。もと子は，女は男より着物に強い興味を持ち，またその興味を生かすことのできる領分を多く持つと考えていた。そして，その領分の中で「創作心や芸術心や美的感情」[25] を満足させていくことを目指した。「学校でも単に質素とか衛生とかいうようなことばかりでなく，身だしなみとか，趣味とかそう云うことにも注意」[26] すべきとも主張する。もと子は当時の人々の服装に対して，着こなしの方面と制作の方面のどちらにも洋服への理解が浅いことを不満に持った。そして，「将来何うしても洋服となるのですから，学校で美術教育をよくして，服装に面白い改良を加えると同時に，また改まった会合などの時には，美しい和服をきちんと着こなす人が，いくらかあれば本当に良い」[27] とし，学校における美術教育と服装教育の密接な関係を主張する。もと子は，美術教育で培われるものを「美に対する教養」と呼び，そうした教養を身につけることで，「清楚」な身だしなみが実現すると考えていた。その「清楚」であることの条件としてもと子と学園の美術講師であった山本鼎は，清潔であること，自分の都合の良いよう適当であること，さっぱりとして非常にシンプルなもので，無駄な余計な装飾を省くことを挙げた[28]。

以上のように，もと子は女性たちの服装に関して，合理的な洋装の着用・製作を奨励しつつ，なおかつ生徒自身の服装観を確立すべく制服ではなく自由服を推奨し，しかしそれらが美しく着こなせること，美しいものを制作できることを求め，服装・縫製における合理化と美化を望んでいた。洋装を着こなす術と制作する技術を自由学園の教育の中でしっかりと生徒たちに指導することは，自由学園における裁縫教育での目的の一つであった。

B　もと子の裁縫教育観

次に，もと子の裁縫教育観を，縫製技能を着実に身につけること，縫製技能と美的感性の獲得の両立，家庭教育との結びつきの３点から捉える。

当時の他の女学校における裁縫教育に対しもと子は，教授が形骸化して生徒たちがしっかりとした技能を身につけられていないと批判し，「進歩した意味に於いての家庭の実務が，その手と頭で，ずんずん明快に運んでゆけるような修行をさせるところが欲しい」[29] と述べた。さらに具体的な構想について，次のように述べる。

> 手仕事というのは，まず自分の服装をはじめ身のまわりを，自分の手で自由に整えることのできるために，一年生は一学期分ずつ細かにつくられる細目に従って，ハンケチ，靴下，肌着類，寝具に関する小物，前掛，仕事着，手袋，襟巻，帽子，スウェター，というような品々を，ついだり新調ったり洗ったり，それらのものに整理の順序をつけて，それをいつでもきちんとして置くことに就ての仕事をするのでございます。裁つこともあり，縫うこともあり，編むことも，刺繍をすることも，ドロンウォークもタッチングも，その時の入用に従って稽古して行きます。そうしてその得

た知識を実地に自分の日々の服装に応用して熟練を積むことを，一つの教課として行く筈でございます[30]。

このように，生活と結びつけた本物の力量形成と，和裁・洋裁・手芸の包括的な取り扱いを構想していた。こうした裁縫教育への関心の高さは，彼女自身，図画，音楽，裁縫が「自分の不得手な学科」[31] であり，芸術・実技教科を自身の子どもに対しても明快な指導ができなかったことに起因する。そのため，学園においてはしっかりと生徒たちに，生活で活用できる裁縫に関しての知識技能を身に付けさせることを目指したのである。また，もと子は，江戸時代以来の女子の「お稽古事」に関して，美的感性の修養と技能の獲得がどっちつかずとなり，裁縫や生花も外面しか身につかず，教授に何年もかかるとしてその不合理を指摘する[32]。もと子は，美的感性が身に付けば自然と作品が生まれてくる，すなわち技能が備わってくるものとし，美的感性の涵養と技能獲得は両輪と捉えていた。

もと子はさらに，裁縫の指導を進める上で家庭の役割も重視した[33]。裁縫の教師と母親が協力して，学校で習ったことの実践を家庭で行うよう仕向けることを奨励したのである。本科１年生の１学期には運針の練習を徹底させるべく，毎日20分ずつ自宅で運針をすること，その結果を１週間ずつに一度ずつ持ち寄り，教師が指導していくことも行なっていた。２学期になって，運針だけでなく実際の裁縫実習として一つ身を製作する段階においても，ただ与えられるサイズに従って服を製作するのではなく，例えば子供服ならば実際に近所の赤子のサイズを測らせてもらうところから始めて，寸法の測り方，服を作る全ての工程を経験させるようにしていた。こうすることで，裁縫を生活の中に明確に位置づかせ，実感として裁縫を体得していくことで，縫製速度を上げていくことも期待した。

このように，もと子によって考えられた裁縫教育は，運針等のしっかりとした練習による基礎づくりを重視し，家庭との連携によって技能定着を促進するとともに，服装教育同様，技能の獲得と合わせて美的感性の涵養も目指していた。

3　自由学園の和裁教育

前節のような思想的背景を踏まえ，本節では学園における裁縫教育の具体的な内容，特に和裁教育実践の内実を明らかにする。先述の通り，もと子は服装においては洋装を奨励し，実際に学園における生徒たちの服装も洋装であることを求めた。他方，そうした思想を持ちつつも，学園においては洋裁と和裁両方に取り組む姿勢を見せた。なぜ洋装・洋裁奨励の学園で和裁も指導されたのか，この問いに答えるべく本節では，実際に和裁指導に携わった青芳とみ子の実践の様相を描きつつ，学園の教育における和裁教育の位置づけを探る。以下，青芳とみ子の和裁教育思想，和裁教育の成果の一つとしての関東大震災における支援活動の実態，そして和裁教育の集大成としての「和服裁縫百時間教授」の実態を明らかにしていく。

A　青芳とみ子の和裁教育思想

自由学園の和裁教育には，青芳とみ子が設立当初から関わっていた。青芳は和洋裁縫女学校を卒業し，もと子とは現千代田区にある富士見町教会にて２度ほど遭っている。この邂逅は，２人がプロテスタント布教者であった植村正久に学んでいたことがきっかけで，この後青芳は，裁縫指導のために学園へ招かれている。これ以後戦後の「家庭科」に至るまで学園の教育に携わり続け，学園創立50周年を迎えた1971年の少し後に定年退職した[34]。

青芳は，学園に着任する前から日本の裁縫教育のあり方に対し，もと子同様不満を持っていた。普通の女学校を卒業した青芳は，卒業後いざ実践してみようにも全くできず，再度和洋裁縫女学校に３年間通って漸くそれなりの技術を身につけたという経験があった。自身の経験に対して青芳は「むしろ女学校時代にもっともっと基礎をかためておき，卒業後は家庭の人の平常着などを何枚も縫うようにして実際の技術を熟練させるようにしたい」[35] と述べる。実際，青芳は現状の和裁教育の問題点として，運針の練習の不十分さ，詰め込みの弊害，「心と手と頭の調和」の未達成の３点を挙げる[36]。そのため青芳は，「運針を徹底的にし，一週間に二時間ずつの裁縫時間で三年間に，和服裁縫の一通りの知識をたしかに自分のものに」[37] することを提案する。短い授業時数の中で運針を中心とした基礎固めをしっかり行い，短い授業時間の中で技術をきちんと身につけるために青芳が編み出していくのが，「和服裁縫百時間教授」の実践であった。

前節のもと子の裁縫教育観も踏まえると，青芳ももと子も，単なる詰め込み主義教育にしないこと，縫製技術の習得をしっかりするために運針や日々の練習を重視することに留意して，その改善を模索していたことがわかる。また，もと子に限ったことで言えば，技

能の習得だけでなく，美的感性を磨くことが造形行為には必要であると考えていた。こうした側面はむしろ洋裁教育や美術工芸教育の方で発揮されるよう指導されていくのだが，和裁教育に関してはどうだったのであろうか。具体的な実践の様相を次項から明らかにしていく。

B　関東大震災での実践

自由学園の裁縫実践が，社会と直に結びついた機会として，1923年９月１日に発生した関東大震災があげられる。

当時は当然のことながら耐震化された建物も少なく関東は壊滅的な損害を被ったが，目白にあるライト設計の自由学園学舎は内部の一部を破損しつつも，ほとんど損害を出さずに済んだ[38]。学園の生徒たちも無事で，９月16日から「一つの学校として統一ある規律の元に，気を揃えて奉仕と勉強」を開始し，生徒たちは被災者への支援活動に乗り出し，以下のような活動を展開した[39]。

生徒たちはまず，家庭から布類を集めた，毎日３時間の勉強の後，集まった布の洗濯，張り出し，繕いを行なっていた。ここでは，ほどきものをする者，伸子張りをする者，そして縫う者と分かれ，さらに縫う者は，表を縫う者，裏を縫う者，袖を縫う者に分かれていた。本科生は和裁を習い始めたばかりで不慣れな者も多く，上級生に教わりながら縫い進められていた。そして，出来上がった100枚の着物を廉売した。第１回の着物の販売では，約半時間で完売した。そして，第２回をその１週間後に開催し，それらの売り上げを基にしてさらに30家族に対して70枚の布団を用意しようとした。それは，廃棄になった布団の綿を回収し，その綿を打ち直して，新しく布を寄せ集めて作ったカバーに入れて，新たに布団を作るという取り組みであった。しかし，さすがに綿が足りなかったのか，「音羽」という布団屋で60貫目ほど綿を購入し，またそこの店主の勧めで布団づくりの職人から布団づくりのコツを教わったり，綿入れに関しては素人の自分たちではなく職人に任せたりする場面もあったという。

大正期は洋装が増加しつつあった時期とはいえ，まだまだ和装の女性も多く存在した。震災での支援活動では，和裁の知識技術が必須であり，それが生かされた場であった。学園において洋装・洋裁を重視しつつ，和裁の教授も行われた理由はこうした社会の実情にあった。

C　和服裁縫百時間教授

創立期からの模索を経て，青芳は「和服裁縫の基礎をつくる教授法」として「和服裁縫百時間教授」を編み出した。自由学園の和裁教育は本科１年生から３年生を対象とし，３年間で合計約100時間で終わるよう設計されていた。学園が設立されたのが1921年であり，1920年７月には「高等女学校令」が改正され，毎週４時間の裁縫の授業が課されていた[40]。青芳によれば，当時の高等女学校が和裁にかける時間は４年間で500時間以上，洋裁まで含めると888時間に及ぶ場合もあり，大体の平均で700から800時間であった[41]。週１回80分の授業[42]で，青芳の提示した３年間100時間で和裁の一通りの手ほどきを終えてしまうというのは，当時の他の女子中等教育と比較して非常に短いものであった。

この実践は，1935年の『婦人之友』４月号から７月号にかけての４回にかけて，「科学的実験的な百時間裁縫」として発表される。また，翌年には婦人之友社から『和服裁縫百時間教授の実際』という書籍の形で出版され，夏休みには学園の教育を公開する機会があり，「百時間和服裁縫教授法」という題目で青芳がその成果を発表した。さらにこの時，パリに２年間留学した後に裁縫の教師となった中島静江が「フランス式裁断法」として，フランスで学んだ裁縫技術を披露しており[43]，洋裁と和裁の技術改良が同時並行だったことがうかがえる。『婦人之友』，書籍，そして講習会という形で紹介された学園の和裁実践は全国に広まったため，全国から自由学園に授業参観に来る裁縫の教師は400人にのぼった[44]。

以下，「和服裁縫百時間教授」の具体的な実態を示す（表１）。

表１　自由学園の和裁教育の実態[45]

学年	学期	時間	内容
1学年	一学期	13時間20分	敬感約運針，各種基礎縫，朋端袢
	二学期	13時間20分	運針，袖・身頃の部分縫(4時間)，一つ身単衣二枚の裁ち方・縫い方(9時間20分)
	三学期	14時間	四つ身単衣裁ち方・縫い方(5時間20分)，本裁女物単衣裁ち方・縫い方(5時間20分)，四つ身力だめし(3時間20分)
合計		40時間40分	
2学年	一学期	15時間40分	本裁男物単衣二枚(10時間40分)，本裁女物単衣の裁ち方・縫い方(5時間)
	二学期	12時間	一つ身袷二枚の裁ち方・縫い方(2時間)，袖と裾の部分縫(10時間)
	三学期	10時間40分	四つ身袷二枚の裁ち方・縫い方(9時間20分)，その他力だめし(1時間20分)
合計		38時間20分	
3学年	一学期	13時間40分	本裁女物袷(6時間40分)，腹合せ帯(4時間20分)，長襦袢(2時間40分)
	二学期	13時間20分	本裁男物袷(6時間40分)，羽織二枚(5時間20分)
	三学期	12時間	男物袷羽織(5時間20分)，一つ身綿入れ二枚(5時間20分)，力だめし(1時間20分)
合計		39時間	

「和服裁縫百時間教授」という名称だが，実はこの表の時間数を合計すると118時間となっており，きっかり100時間という訳ではない。「縫い上げる『量』よりも，最も基礎的な運針の熟練によって，百時間に二〇枚，普通の家庭に必要なものを完全に縫い得るまでになる」[46] ということを目標にしており，ここでいう「二〇枚」とは，単衣一つ身二枚，四つ身単衣二枚，本裁男女（単衣）各二枚，袷四つ身二枚，腹合せ帯，袷本裁二枚，綿入れ二枚，長襦袢，男女袷羽織，袷一つ身二枚を指す[47]。同時代の高等女学校のカリキュラムの一例として，今村順子の『新編裁縫教科書』[48] を確認すると，上巻では，各種襦袢の裁ち方，各種単衣，三つ身袷，一つ身綿入，綿布縫い方，男女の本裁単衣，男女の本裁袷，男女の本裁綿入，中巻では，女袴，男女の本裁綿入羽織，長襦袢，腹合帯，下巻では，男袴，その他足袋などの小物となっている。授業時間は短くとも学園の和裁教育が，高等女学校で習うべき内容をほぼ網羅していたことがわかる。

また，本科１年生は運針の練習を徹底していた。先述の青芳やもと子の不満からわかる通り，それは基礎固めもせずに製作に取り掛かっていた従来の裁縫教育への反省からきている。徹底練習された運針だが，その運針の練習成果は，1925年の学期末の「成績発表会」でも披露された[49]。そこでは運針の勉強が進んでいたことと，手芸と洋裁教育に関する今後の改善すべき点が，生徒側から教師側に伝えられた。さらに同様の催しとして，「裁縫報告会」という1926年の７月の成績報告会の一部で，本科１年生が１班ずつ壇上に上がってマーチに合わせて運針をしている[50]。これは，毎日運針で一丈（３メートル）ずつ練習していた成果を示すためのものであった。

学園の和裁教育は本科１年生から３年生のカリキュラムであったため，運針など基礎固めを重視した実践となっていた。洋裁は４年生以上に課されていた[51] ため，カリキュラムの構造上，和裁教育は洋裁教育の基礎課程のような体をなしていた。そして，短時間での内容の網羅性から鑑みるに，その実態は教授法の徹底的な合理化という姿勢が貫かれていたといえる。

４　自由学園の洋裁教育

第２節で述べたように，自由学園の生徒たちはもと子の意向の下，洋装を日頃から身につけるよう指導されていた。では，もと子の生活の合理化と美化という思想の反映としての洋裁教育は，自由学園の中でどのような実践として展開されていたのであろうか。自由学園の創設初期に洋裁教育を担当していたのは，西島芳太郎という人物であった。本節では，この西島芳太郎の洋裁教育論と初期の実践について述べた後，洋裁と美術の融合，洋裁教育の合理化と工場化という順に，明らかにしていく。

Ａ　西島芳太郎の洋裁教育観と学園初期の洋裁教育

西島芳太郎は，創設初期の自由学園の講師陣は，女学校という性格上日本人外国人問わず女性教師が多い中，美術の山本鼎，理科の和田八重造と並んで数少ない男性教師であり，かつ担当科目が裁縫という異色の人物であった。彼は学園が創立された1921年から1946年まで[52] の26年にわたって洋裁指導を行い，『婦人之友』に対しても1920年の２月号から1951年の４月号まで，ほぼ毎号洋裁に関する記事を掲載している。その記事の内容は，主に洋服における子供服と婦人服の製作方法に関して，布の寸法や裁ち方，製作手順を詳述していた。

西島の戦後の著作・論考では，型紙教育批判や日本における洋裁の歴史について語られている。型紙教育批判の中には，自由学園での30年にわたる「実験」を引いて，型紙そのものの制作は子どもたちも教えればできるものであるのだと実証し，既存の型紙を使用する型紙教育を推奨するアメリカ教育視察団に対し「視察団の皆様はこの自由学園を参観されなかったのでしょうか」と痛烈な皮肉を述べている[53]。西島は，既成の型紙に頼るのではなく，子ども自身に採寸させることで，衣服の完成形のイメージを持たせることを重視していた。

では，学園では実際にどのような指導をしていたのか。まずは，洋装そのものに慣れることから始まる。学園は創設当初，生徒たち自身洋服を常服として着用する者が少なかったこともあり，和裁を教えるよりも幾分かの手間がかかった。なぜなら，明治期・大正期の高等女学校の裁縫教科書では和裁の内容が大部分を占め洋裁内容はほんの一部しか見られない状況であり，大正末期になってようやく子ども服が題材として教科書に載り始めたくらいだったからである。さらに井澤尚子による成田順の1923年の著書『子供服の時代化』の分析によれば，裁縫の教科書には色彩に関する記述も見受けられなかった[54]。つまり，当時の女子中等教育では，洋裁の方法論だけでなく色彩論も珍しいものであった。この成田順は，1928年から東京女子高等師範学校の教授職に就き，翌年からは女性初の督学

官となって全国を巡回，洋裁教育を普及した[55]。この頃から洋裁教育が本格化したと捉えると，学園による洋裁教育の先駆性がわかる。

その結果，学園側では洋装に不慣れな生徒たちへの対応として，作法の教師であった斎藤その子によって洋服の着方や下着の使用方法を，山本鼎からは調和の取れた色彩や形の釣り合いといった内容の服装指導がなされた[56]。色彩や形といった美術に関する知識を洋装に積極的に生かそうとする姿勢，すなわち衣生活における「実際」と「芸術」の融合は，もと子の構想通りに，学園創設初期から意識されていたといえる。実際の洋裁指導では，西島自身は洋裁を教授するにあたり，西洋から輸入した方法をそのまま教えるのではなく，日本人に合った洋服の裁ち方，縫い方，着方などの工夫改良を重ねた。そして，生徒たちには，ブラウスからスカート，ワンピース，コートと１枚１枚順々にその製作方法が指導された[57]。

B　洋裁と芸術の融合

学園の洋裁教育においては，デザインに関して美術教育とも関連した融合が進んでいた。それは，洋服それ自体に美しさを求めた探求であった。

その試みを示すために，卒業研究のテーマを概観する。卒業研究とは，自由学園創設初期から行なっていた高等科２年を主体とした１つの大きなテーマのもと進められる，プロジェクト学習である。初出では，1924年度の高等科２年生が「卒業勉強」として「我が住む町」という研究をしている[58]。翌年以降は本科５年終了時にもちょっとした卒業研究が行なわれるようになり，研究とは別に卒業勉強として色や形も自分で選んで洋服を作るという課題が課された[59]。卒業研究は，基本的には各グループに分かれて進められていた。1934年度から1938年度にかけての洋裁グループの研究に着目すると，服のデザインや洋裁教育の合理化の検討，子供服の検討を行っている[60]。一方，美術グループも見てみると，室内装飾や壁掛け，生徒の服装に関する研究など，洋裁にも関係するような研究テーマを設定している。また，1934年度の洋裁の卒業研究は卒業式服のデザインであり，美術グループとの協働が明確に指示されており，裁縫教育と美術教育の垣根を超えた活動が実現していた。

1935年度の卒業生は，卒業研究として「布の研究」を行っている[61]。これは，身近なところから集めた3000種以上の布を質・織り方等の基準で分類する研究であり[62]，縫製の仕方だけでなくその縫製の元となる布地を研究したことは，生徒たちが糸・布への関心を深めたことを意味する。この発表に対し，学園の裁縫教師の一人である中島が「黄のブルーズや茶でかへ衿のついていたものなどは大変よいデザインだ」と称賛する一方，陳列するという意識が希薄なため作品を並べたときの色や形がちぐはぐであることを気になったと指摘する[63]。洋裁の作品を一つの完結したものとして捉えるのではなく，他の作品との調和を意識させようとするあたり，教育にとどまらず商品としての完成度を求めるようになった。

C　洋裁教育の合理化と工場化

前項のように芸術との融合が進む一方，学園の洋裁教育では縫製作業の合理化も進められた。

1935年12月８日発行の『学園新聞』84号において，高等科の裁縫グループの実践の新たな形態が紹介されている[64]。それはグループ別の分業作業で，４人１組の３組に分かれ，その４人の中でもさらに「主人」１人と「弟子」３人に分かれて，「主人」は仮縫いから仕上げまでの責任を負い，どうしてもわからないところを先生に質問しにいく役割を担う形態だった。この形のまま，工芸研究所[65]に寄せられた注文を請け追うということも行なっていた。研究所の衣服研究部からハーフコート製作の依頼を受け，授業で実践し，その出来上がった品を研究所に収め縫代を受け取るという流れである。その縫代は，裁縫室の設備の費用に当てていた。「私達の勉強はただ個人のお稽古事でない。それは何等かの形を取って公に役立つもの」[66]をという趣旨の下，研究所に寄せられた注文の品を製作している。学校内の授業で個人の技能を高めるだけでなく，集団の分業体制による衣服の生産や実際の経済的やり取りに取り組むことで，社会とのつながりを強く意識した実践となっている。

第３節で指摘した通り，学園の和裁教育は「和服裁縫百時間教授」を完成させ，教授法の徹底的な合理化が目指された。一方洋裁教育もその後を追って，幾度かその合理化が図られたが，それらの試みはいずれも挫折した。そして，1937年に漸く「洋服裁縫教授」における「大改革」[67]が本格化した。それは，1937年度の卒業生がもと子に促されて，「子供服の縫い方研究」の一環として「洋服裁縫基礎技術教授法の研究」に着手したことがきっかけだった[68]。そして，この卒業生たちの研究に続いて教授法の開発が進んでいくことになり，「百時間和服裁縫」ならぬ「二百時間洋服裁縫」[69]という実践が完成した。和裁教育の２倍近くの

時間を洋裁教育に注いでことからも，洋裁教育への力の入れ様が読み取れる。そこで編み出された方法が，「明日館のデザインで消費組合が全国的に募集する洋服の工場になること」[70] であった。この頃，消費組合が予約募集した子供服と下着の製作を，工芸研究所によるデザインを基に洋裁の授業で製作するという取り組みを行っており，生徒たちは単なる下請けとなるのではなく積極的に勉強に繋げようとしていた。当時のこと生徒は「いわゆるお稽古事でない，本式の仕事が要求された」[71] と振り返る。

この実践の中で生徒たちは，生活の技術における量的・質的なお互いの差を発見できたこと，回を重ねるごとに各々の裁縫の技量が上がっていったこと，そして，社会に良い品物を送り出すことができたことという 3 点の収穫を指摘した。技量向上の具体例としては，洋裁教育の合理化を図る際に計測した，子供服・ブルマーを縫うのにかかる時間を記録したものがある[72]。その記録からは，縫うのが早い人と遅い人の差，回を重ねるごとに縫う速度が上がっていったことが読み取れる。それと同時に，学園の裁縫実践が技術向上のためにこうした数値を用い出したことは，「合理化」という思想を超え，上記の「工場」化の側面が強まったといえる。

5　おわりに

以上，自由学園における裁縫教育の歴史的意義を明らかにすべく，1920年代から1930年代にかけての裁縫教育実践の展開を，和裁教育と洋裁教育に分けて描出してきた。その中で明らかになったことを 3 点挙げる。

1 点目は，もと子の衣生活に関する思想には，時間的経済的な節約としての「合理化」の他，女性の外見を整えるという意味での「美化」という考え方も含まれていたことである。この「美化」という視点は，裁縫教育において美術教育との関連を重視するという学園における教育の姿勢にも通底していた。

2 点目は，学園が洋装・洋裁志向でありつつも，実際の社会における和装と洋装との二重生活を考慮したうえで，並びに洋裁に備えた基礎技術の養成という観点から，和裁教育も重視したことである。そして，青芳の指導の下時間的技術的な合理性を追求した結果，「和服裁縫百時間教授」という他の女学校よりも圧倒的に短い授業時数での実践を完成させた。

3 点目は，洋裁教育においては，特に第 1 節で明らかにしたようなもと子の「美化」の思想が反映され，美術教育との往還が見られたことである。一方，縫製技術の合理化を進める中で，合理化を超えた「工場化」のような面も擁するようになってきていたことも指摘できる。総じて，「生活」を常に意識した「合理化」と「美化」が，自由学園の裁縫教育実践における特徴であった。

自由学園の裁縫教育実践は，もと子の衣生活に関する思想が実現した場であった。それは，女子の裁縫教育に漸く徐々に洋裁が導入しつつあった時代にあって，先駆的に洋裁を取り上げた実践であり，また，服装の「美」ということにひたすら拘った実践であった。特に「美」の視点は，美術工芸教育という学園独自の実践が発展したことの影響も受けていた。また，研究所を通じた注文も受け付け，授業で製作したものを社会に還元したことで，学校における裁縫教育を家庭内にとどまらない社会とつながった意味あるものとして位置づけていた。自由学園の裁縫教育は，和裁を他の女学校と同じように重視しつつ，生活合理化の観点から洋裁により力を入れ，美術との関連から「美」を追求するという独自の実践を確立するに至ったといえる。

最後に今後の課題としては，自由学園の実践の裁縫教育史における位置付けをより明らかにするためにも，職業訓練系以外の他の女子中等教育における裁縫教育実践の具体相を明らかにすること，そして自由学園の美術工芸教育と裁縫教育の関係をカリキュラムから明らかにすることの 2 点をあげておく。

注

1）羽仁もと子「『自由学園』の創立－私共同志の新事業に御賛成を願います－」,『婦人之友』1921年 2 月号，p.11.

2）中野光『大正自由教育の研究』黎明書房，1998，p.209.

3）中嶋みさき「自由学園・「自労自治」の教育とジェンダー：羽仁もと子の「生活」概念をてがかりに」橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店，2003，pp.101-127.

4）久井英輔『近代日本の生活改善運動と〈中流〉の変容：社会教育の対象/主体への認識をめぐる歴史的考察』学文社，2019，p.103.

5）立川正世「羽仁もと子の教育思想」『大正の教育的想像力－「教育実際家」たちの「大正新教育」－』黎明書房，2018，pp.58-83.

6）村上民「自由学園草創期（1921-1932年）の美術教育－羽仁もと子・吉一と山本鼎の協働を中心に」（『生活大学研究』1 巻，2015，pp.26-44），村上民「戦時下自由学園の美術教育運動－「美術」と「工芸」の重層的展開をめぐって」（『生活大学研究』2 巻，2016，pp.9-25）.

7）村上民「戦時下における自由学園の教育(1)各種学校・自由学園

の存続問題を中心に」（『生活大学研究』６巻，2021，pp.76-91），村上民「戦時下に自由学園の教育⑵戦時下「生活即教育」の諸相」（『生活大学研究』６巻，2021，pp.91-117）．
８）清重めい「1940年代における自由学園の裁縫教育実践：生活合理化運動と戦時体制の親和性に着目して」『日本家政学会誌』72巻８号，2021，pp.519-528.
９）西村絢子「羽仁もと子の教育論－女子教育観と生活主義教育の系譜について」（『教育学研究』40巻３号，1973，pp.242-250），斎藤道子『羽仁もと子　生涯と思想』（ドメス出版，1988），林美帆「羽仁もと子の思想形成と理想社会－自由・協力・愛－」（『歴史学研究』804号，2005，pp.20-36），林美帆「羽仁もと子と母性保護論争－与謝野明子と平塚らいてうとの接点－」（『生活大学研究』３巻，2017，pp.1-19）．
10）小関孝子『生活合理化と家庭の近代　全国友の会による「カイゼン」と『婦人之友』』勁草書房，2015.
11）内田知行「共生の思想－戦時下の自由学園北京生活学校」（『日本植民地研究』11号，1999，pp.17-34），太田孝子「自由学園北京生活学校の教育：日中戦時下の教育活動」（『岐阜大学留学生センター紀要』１巻，1999，pp.3-19），李紅衛「戦時下の日中教育文化交流に関する一考察－自由学園北京生活学校（1938-1945年）を中心に」（『アジア教育史研究』13号，2004，pp.72-86），王娟「自由学園北京生活学校の設立について」『鶴山論叢』10号，2010，pp.1-19），山本一生「生活指導における保育者の役割：自由学園北京生活学校を事例に」（『上田女子短期大学紀要』40号，2017，pp.51-60）．
12）前掲１，pp.5-8.
13）常見育男『家庭科教育史　増補版』光生館，1972.
14）小檜山ルイ「『婦人之友』における洋装化運動とモダンガール」『モダンガールと植民地的近代：東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店，2010，伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ編，pp.175-202.
15）夫馬佳代子「明治期の衣服改良運動と大正期の服装改善運動について」（『一宮女子短期大学紀要』27号，1988，pp.19-30），夫馬佳代子・松田純子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷」（『生活文化史』31号，1997，pp.59-89），夫馬佳代子編『衣服改良運動と服装改善運動』（家政教育社，2007）．
16）桑田直子「市民洋装普及過程における裁縫科の展開とディレンマ―成田順の洋裁教育論を中心に―」『教育学研究』65巻２号，1998，pp.1-10.
17）田中陽子「大正自由教育の小学校裁縫科教授法への影響と限界」『日本家庭科教育学会誌』46巻２号，2003，pp.103-113.
18）赤崎真弓他「木下竹次の裁縫教育の成立と展開－『裁縫新教授法』『新裁縫学習法』『裁縫の創作的学習法』及び『裁縫学習の建設』について－」（『教育学研究紀要』26巻，1981，pp.491-498），多々納道子他「木下竹次の裁縫教育の成立と展開－成立期における裁縫科の教育的価値－」（『教育学研究紀要』27巻，1982，pp.479-492），福田公子他「木下竹次の裁縫教育の成立と展開－評価活動について－」（『教育学研究紀要』29巻，1984，pp.452-455），藤原純子他「木下竹次の裁縫教育の成立と展開－裁縫教師の養成について－」（『教育学研究紀要』30巻，1985，pp.480-483），福田公子他「木下竹次の裁縫教育の成立と展開－中沢か寿め氏を中心とした個人史にみられる影響－」（『教育学研究紀要』31巻，1986，pp.455-458），赤崎真弓他「木下竹次の裁縫教育の成立と展開－合科学習について－」（『教育学研究紀要』32巻２号，1987，pp.349-359），佐藤園・原田省吾「奈良女子高師附小における木下竹次の学校教育の構想と家事・裁縫科教育の位置付け－家庭科における「子ども」と「科学」の統合に関する研究（一）」（『岡山大学教育学部研究集録』123号，2003，pp.37-45），佐藤園・原田省吾「奈良女子高師附小における「大合科学習」の理念と家事・裁縫科教育の実践－家庭科における「子ども」と「科学」の統合に関する研究（二）」（『岡山大学教育学部研究集録』124号，2003，pp.1-9）．
19）家永三郎「日本人の洋装観の変遷」『日本近代思想史研究』東京大学出版会，1953，pp.283-304.
20）羽仁進『自由学園物語』講談社，1984，p.34.
21）羽仁もと子「服装の教育」『婦人之友』1924年10月号，p.2.
22）前掲１，p.10.
23）前掲22，p.5.
24）前掲22，p.6.
25）前掲22，p.3.
26）「服装と身だしなみの研究－三月一日夜自由学園にて－」『婦人之友』1927年４月号，p.3.
27）同前，p.5.
28）同前，p.7.
29）前掲１，p.2.
30）前掲１，p.6.
31）前掲１，p.3.
32）羽仁もと子『羽仁もと子著作集第11巻家庭教育編』婦人之友社，1929，p.248.
33）同前，pp.231-239.
34）中島静江「訃報　青芳とみ子先生」『学園新聞』（復刻版）328号（1982年３月25日），p.2.
35）青芳とみ子「和服裁縫について　毎日十五分間の運針」『婦人之友』1928年６月号，pp.50-53.
36）同前，pp.51-52.
37）同前，p.52.
38）羽仁もと子『羽仁もと子著作集第14巻半生を語る』婦人之友社，1928，pp.188-189.
39）自由学園女子部卒業生会『自由学園の歴史Ⅰ：雑司が谷時代』婦人之友社，1985，p.117.
40）毎週４時間で，春・夏・冬休みを除いて年に約30週通学するとすれば，１年に120時間，３年間で360時間にのぼることとなる。
41）青芳とみ子「科学的・実験的百時間裁縫その１」『婦人之友』1935年４月号，p.70.
42）青芳とみ子『和服裁縫百時間教授の実際』婦人之友社，1936，p.4.
43）自由学園女子部卒業生会『自由学園の歴史Ⅱ：女子部の記録1934-1958』婦人之友社，1991，p.64.
44）「百時間裁縫の本出づ　学園の牧場より」『学園新聞』（活字版）88号（1936年５月15日），p.2.
45）前掲43を元に，筆者が作成。
46）前掲41，p.64.
47）前掲41，p.67.
48）今村順子『編物裁縫教科書』上巻～下巻目黒書店，1913.

49）羽仁もと子「身辺雑記」『婦人之友』1925年８月号，pp.199-201.
50）前掲40，pp.161-162.
51）青芳とみ子「科学的・実験的百時間裁縫その４」『婦人之友』1935年７月号，p.195.
52）中島静江「学園最初の洋裁の先生　西島芳太郎先生を悼む」『学園新聞』（復刻版）322号（1981年８月25日），p.4.
53）西島芳太郎「型紙教育に反対する」『家庭科教育』27巻５号，1953，pp.34-36.
54）井澤尚子「洋裁教育にみる服装と色彩の表現－洋裁指導書『子供服の時代化』を中心に－」『日本色彩学会誌』39巻５号，2015，pp.175-177.
55）前掲16.
56）前掲40，p.41.
57）前掲51.
58）前掲40，p.128.
59）前掲40，p.145.
60）前掲44，p.36，p.63，p.76，p.99.
61）「卒業研究の批判をきく」『学園新聞』（活字版）88号（1936年５月15日），p.4.
62）同前，p.4.
63）同前，p.4.
64）「洋裁の新しい勉強」『学園新聞』（活字版）84号（1935年12月８日），p.4.
65）「工芸研究所」とは，1930年の春に学園の卒業生たちを中心に創設された「自由学園工芸研究所」のことである。現在も「自由学園生活工芸研究所」として明日館にて存続している。工芸研究所は，自由学園の美術教育の延長として，社会に積極的に新たな生活デザインを提起していく場として機能していた。２人の留学生の派遣も行い，ドイツのイッテン・シューレの技術も取り入れていた。
66）「洋裁の新しい勉強」『学園新聞』（活字版）84号（1935年12月８日），p.4.
67）「洋服裁縫教授に大改革」『学園新聞』（活字版）100号（1937年７月10日），p.1.
68）同前，p.1.
69）「衣服整理の研究」『学園新聞』（活字版）110号（1938年11月25日），p.4.
70）前掲68，p.1.
71）前掲44，p.74.
72）前掲68，p.1.

（指導教員　浅井幸子教授）